令和8年度　沖縄県若年性認知症支援推進事業
一般講演会
令和8年11月7日（土）13時30分　-　16時00分

# 認知症を見守るから共に生きる

福岡県大牟田市における実践を通して考える

医療法人　静光園　白川病院

医療連携室　猿渡 進平

saru@shirakawa.or.jp

# 本日お話したいこと

1 認知症を地域で支える（20年の実践）

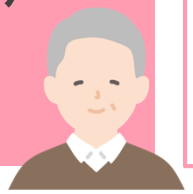
2 実践からの違和感

3 認知症とともに生きるまちづくりとは

# 認知症を地域で支える（20年の実践）

## 医療機関で働くSWとして本人や家族から聞く声

**本人の声**



- 家の様子が気になるので自宅を見に行きたい。
- 仏壇に線香をあげるのが、私の役割。
- 子どもたちとの思い出が詰まった家に帰りたい。

→　退院して自宅に帰りたい。

**家族の声**

- 心配なので自宅への退院は考えていない。
- 自宅に帰ってきても、対応できる人がいない。
- 近隣住民に迷惑をかけたので、施設を検討している。

→　自宅に帰ってきてもらうと困る。

**結果、施設に退院せざるをえない患者さんが多い。**

# 認知症を地域で支える（20年の実践）

## 認知症　徘徊模擬訓練との出会い（2004年-）

1. 認知症の人と家族を支え、見守る地域の意識を高め認知症の理解を促進していく
2. 高齢者を隣近所、地域ぐるみ、多職種協働により可能な限り、声かけ、見守り、保護していく実効性の高いしくみの充実
3. 認知症になっても安心して暮らせるために、「安心して外出できるまち」を目指していく

各小学校校区での実行委員会の設立

実行委員会メンバー（校区によってメンバーは異なる）

- ○民生委員・児童委員協議会
- ○校区社会福祉協議会
- ○地域包括支援センター
- ○大牟田市 福祉課
- ○校区町内公民館連絡協議会
- ○地域の医療、介護事業所(事務局)
- ○認知症ライフサポート研究会運営委員

# 認知症を地域で支える（20年の実践）

2007年9月23日（日）

参加者：9名 ／外出役：1名

## 第1回　白川校区　認知症　徘徊模擬訓練

実行委員を中心に、事務局に集合し開会式を実施した。

事前の認知症学習として、認知症サポーター養成講座・ 声掛けの方法・道に迷った方を見つけた際の連絡先等を学んだ。その後、外出役に対し声をかける模擬訓練を2時間実施した。＊連絡網無し。啓発メイン。

# 認知症を地域で支える（20年の実践）

## 現在までの認知症　徘徊模擬訓練の参加者状況

| | 19年度(2007) | 20年度(2008) | 21年度(2009) | 22年度(2010) | 23年度(2011) | 24年度(2012) | 25年度(2013) | 26年度(2014) | 27年度(2015) | 28年度(2016) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 徘徊役 | 1名 | 6名 | 20名 | 26名 | 26名 | 26名 | 26名 | 50名 | 26名 | 13名 |
| 参加者 | 9名 | 87名 | 240名 | 165名 | 167名 | 162名 | 185名 | 232名 | 192名 | 202名 |
| 声かけ | 1件 | 35件 | 361件 | 247件 | 268件 | 317件 | 299件 | 492件 | 304件 | 151件 |

※28年度は2回実施

# 実践からの違和感

## 模擬訓練当初から訓練の実行委員長として活動してきた住民の声

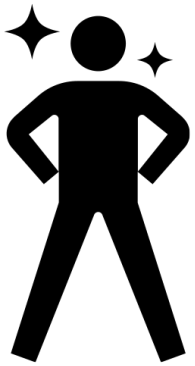
| | |
|---|---|
| **模擬訓練の成果** | 多くの住民が活動に参加するようになり**「地域の中での体制」が構築できつつある**。熱心に「認知症の人を支えましょう」と言い続けてきた結果だと考えている。 |
| **懐疑的なこと** | **長年、この訓練に携わってきた人が認知症になり、閉じこもりがちになっている**。これは「認知症になっても安心して外出できる」という目的とは逆の結果である。<br><br>私自身に置き換えてみると、**認知症になったら「恥」をかきたくない**ので自宅に引きこもるだろう。自分の中の認知症像が「それ」であるとすれば、**多くの住民も「そう」である**。訓練が「それ」を作ってきたのかもしれない。 |

**NPO法人しらかわの会　理事長　前原 剛さん**

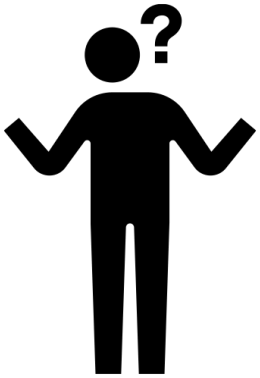
# 実践からの違和感

境　界　線

認知症ではない



認知症の人



支えなくてはならない → 支えられないといけない

なりたくない・認めたくない

# 実践からの違和感

## 事例1：行方不明になった後、施設へ入所した事例

80代の女性が行方不明になる。行方不明の情報が流れ、およそ2時間後に本人を発見。
夫が警察に迎えに来て自宅に帰ることができた。地域包括支援センターや地域住民は、本人を見守るための体制会議を実施し、定期的な見守りを行うようになる。その1週間後、本人は施設へ入所する。

## 事例2：噂から地域住民が心配し、本人のゴミを集積場に運んだ事例

80代女性。自治会の行事や旅行を楽しみに生活していた。
ある時から「認知症では？」という噂が流れ始めた。
地域住民は、本人はゴミの分別などができないのではないか心配し、本人の庭に置いてあったゴミを集積場に運んだ。
本人はそれに憤慨し、外出をしなくなり引っ越した。

# 実践からの違和感

娘から「認知症じゃないか」と言われ、無理やり受診させられた。
「認知症」だと言われ、定期的な受診、薬も処方された。

病院の事務員から、地域にあるサロンや介護保険の説明を受けた「そんなところ行かないです」と伝えたら「進行しますよ」と言われた。

家に帰ったら、地域包括支援センターの職員が来て「困ったことはないか」と聞いてきた。「何もない」と答えたら「定期的に来る」と言われた。

娘に話したら、職場に連絡していた。職場から時短勤務を言われた。
娘が自宅に来て、いきなり家の中の整理をして通帳は預かられ、運転免許の返納を勧めてきた。

今度は、あなたが来て「困ったことはないか」と聞いてくる。

私は、認知症の診断を受ける前と何も変わっていない。あなた方が、余計な心配をするから、どんどん不安になって、ここ数日間、寝れない状況が続いている。何か大変なことが起きるんじゃないかと自信もなくなってきた。

# 実践からの違和感

私たちは、「誰のため」に「何のため」に

支援・活動をしてきたのか

－自分の中の認知症観の問い直し－

個別支援の中で

目の前の人と出会い直す

# 関わり方を変える

## （自分や周囲の）課題解決指向

① 周囲に及ぼす影響（予想）

② その解決策を検討

③ 周囲で決定する

→（周囲の）困りごとを減らす視点

# 関わり方を変える

## （本人の）可能性指向

① 本人の声をきく

② 肯定する

③ 一緒にやってみる

→ 本人の人生を広げる視点

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

# 認知症とともに生きるまちづくりとは

## 新たな社会支援の創出に

### 要介護高齢者 生き生きと

### 事業所が軽作業提供

#### 市担当課呼び掛けで

#### デイ利用者ら1時間程度

大牟田

大牟田市内のデイサービス利用者が、市内の企業や事業所で生き生きと働く姿が見られている。仕事に汗を流しているのは要介護の高齢者たちで、働くことで対価を手にする。「現役の時のようにはいかないが、自分たちも、まだまだ社会とつながって役に立つことができる」という思いが自信につながり、日々の生活にも張りが出ているという。高齢者にとって〝働くこと〟が新たな生きがいになっている。

この取り組みは、同市健康福祉推進室健康長寿支援課が中心となって地域共生を目指し、新たな社会支援の創出を目的に行われている。これまで事業所と福祉施設に呼び掛けてマッチングを図るために、勉強会なども重ねてきた。

その結果、現在はホンダカーズ大牟田北手錬店でリハビリ特化型デイサービス「ライズ」、グリンピース磯浜で小規模多機能型居宅介護事業所リビングアエル小浜、石橋ファームで小規模多機能ホームいまやまの家といった各施設を利用する高齢者たちが、仕事に取り組んでいる。

仕事内容は、要介護の高齢者が安全に取り組むことができる比較的軽度なもの。事業所側は労力の確保と社会貢献、高齢者側は社会とのつながりと生きがい創出というメリットがそれぞれある。何より、わずかながらでも働くことで賃金を手にすることが高齢者にとって非常に大きな喜びになっているという。

働く高齢者からは「少しだけど、孫にお小遣いを渡しました」「妻が好きなパンを買ってあげました」などの声が聞かれている。そして「自分で働いて手にしたお金だから、誰に気兼ねすることなく使えて、とてもうれしい」と。

△ ▽

ホンダカーズ大牟田北手錬店では週に4日、リハビリ特化型デイサービス「ライズ」の利用者が働いている。仕事時間は基本的に1時間程度で、内容は展示車の洗車。1回につき1～2人が作業に取り組み、安全面を考慮して必ず1人以上のデイサービスの職員が補助に付く。

現在、同店で働いているのは要介護1、2など6人の高齢者。2月末から練習を行い、正式に3月から働き始めた。最初は1時間かけて1台を仕上げるのも難しかったが、今は2台の洗車を完了することもあるという。

同施設を運営する森健一朗さんは「最初は戸惑いもありました。本当に大丈夫かと。しかし、働きに行くことで利用者の気持ちの改善や身体能力回復にもつながって本当に驚いています。働くことを通じて表情も明るくなり、日常生活の活動性も上がっています」と驚きを隠さない。

高齢者たちは、働くことで「まだ自分たちはやれることがある」と自信を持つようになり、できなくなっていたことにチャレンジする姿勢も見えるという。

元運転手だった坂本辰喜さん（66）は「施設の中でレクリエーションをするのもいいが、やっぱり働くのは楽しい」と笑顔を見せる。さらに「最初は足がついていかなかったこともありましたが、やっていくうちにこつをつかみ、効率も上がってきました。これからも働きたい」と話した。

市健康福祉推進室長の池田武俊さんは「社会性が低下すると、生活機能も衰える。今回のように働くことで社会とつながり、自信を取り戻し、生活能力を回復させるのは自立支援にもつながる。高齢者だけでなく、社会的に孤立している人は多い。この取り組みがさまざまな分野で自立支援のきっかけになれば」と大きな期待を寄せている。

（小柳 聡）

洗車作業に取り組む施設利用者たち

### 本市の認知症などの取り組みが、また一歩前へ

ヤマト運輸㈱と福祉施設の「てつお」と「ライズ」が協力・連携し、福祉サービスを利用している人が配送業務を行う取り組みが進められています。高次脳機能障害のある89歳の女性は、今年の2月から週に一回、配送業務を開始。毎回、20通程度のダイレクトメールを、職員と一緒に徒歩で施設周辺を配ります。地域の人から励ましの声を掛けられたりするなど、顔の見えるいい関係ができています。また、何よりも本人のやりがいになっていて、「足腰は強いので、景色を見ながら楽しくやっています」と話しました。6月20日は手当の日で、施設の管理者から1月分の賃金が支払われ、周りの人から祝福の声があがりました。

全国的に珍しい取り組みに、各地から注目が集まっています。

# 専門職の意識変容①

**事例1：保育園で園長をされていた、80代女性の事例**

本人

**Oさん**
（80代女性）

- 娘と2人暮らし
- 介護保険認定は要支援2
- ヘルパー（家事支援）とデイサービスを受ける

専門職

**Tさん**
（包括）

- 前任者から引き継ぎ、介護予防支援計画を担当
- 「ご本人やご家族からも何の希望がないので、とりあえずこのままで。」と特に何も考えることなく、毎月の計画を立てていた。

**専門職が可能性志向に基づき、本人との対話を深めると…**

- Oさんは保育園の元園長だった
- 園児の引率で動物園に何十年間も通っていた
- 本人はまた動物園に行きたいと思っている

▼

思い切って本人と動物園に行った

# 専門職の意識変容①

## 本人の様子

- 本人はとても喜び「ここは、キリンがいたのに象がいる！」と見たこともない表情でとても嬉しそうに語った。
- いつもより足取りが良いように感じたが、途中で歩けなくなった最後まで辿り着けずとても悔しそうだった。

## 専門職がまちの課題に気づく

包括Tさん
「高齢者であれば、誰でもあることではないか」

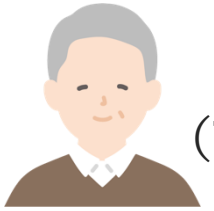
▼

動物園の園長に事情を話し、地元の家具屋さんの協力のもと、ベンチを数台設置した

# 専門職の意識変容②

## 事例1：元々学校の先生だった70代男性の事例

本人



**Kさん**
**（70代男性）**

- 妻と2人暮らし
- 数年前から物忘れ、妻に対する暴言等があった
- 認知症外来を受診し診断を受けた
- 妻が閉じこもりになっている本人を心配し、介護保険の認定を受ける。結果は要介護１
- 現在はデイサービスを週3回利用

**専門職が可能性志向に基づき、本人との対話を深めると…**

- Kさんの経歴：学校の教員、塾の講師、市議会議員など
- 本人は「今でも人の前で話すのが好き、社会の為に役に立ちたい」と強く願っている

**小中学校の「認知症教室」で子どもたちに話す機会を作る**

# 専門職の意識変容②

## 本人の様子

- 本人は始めは躊躇していたが「私でできることなら」と引き受けてくれた。
- 生徒の前で「自分のこと」「認知症になってからの体験」「認知症の人への接し方や工夫」等を堂々と話してくれた。
- 帰りは足取りが軽く「次はいつあっとね？」と嬉しそうに話してくれた。

## 生徒の感想

認知症になってもいままで通り生活もかわらないんかいる心配されすぎて声をかけられすぎたらうざくかんじてしまう。接しかたは、今までをおりにしてもらったらかがありがたいなと。最後には夢を持つことが大事ということが分かりました。

認知症の人でもポジティブで，物忘れもそこまでひどくもなくて，特別なあつかいをする必要はなくて，みんな一緒で自然に生活することが大切と思いました。

# 認知症とともに生きるまちづくりとは

「可能性指向が生み出す本人参画のプロセス」

**①支援者の関りが変わる**

■可能性指向
・本人の声を聴く
・本人を肯定する
・一緒にやってみる

**②本人との関係性が変わる**

・安心して話せる
・「認知症である自分」を受け入れられる
・本人が自らの経験や想いを語り始める

**③ 本人の願いが見えてくる**

・同じ立場の人と話したい
・仲間がほしい
・自分の経験を役立てたい
・社会とつながり続けたい

**④ 本人同士のつながりを望む**

・ピアサポート
・仲間との出会い
・相互に勇気づけ合う

**⑤ ミーティングセンター（本人と家族の一体的支援プログラム）の誕生**

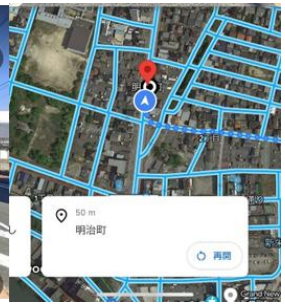
本人の願いから生まれた場
（本人ミーティングは、支援者がつくったものではない。）

# 認知症とともに生きるまちづくりとは

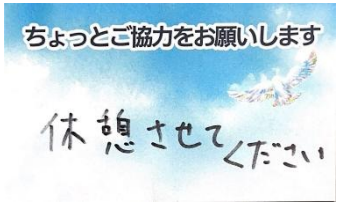
## 自分でできること「タウンウォーク」

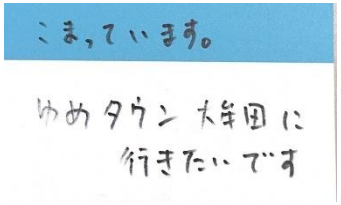
本人の予防的な取り組み

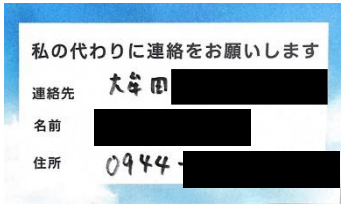
### ①地図アプリを活用した練習



### ②ヘルプカードを使った練習



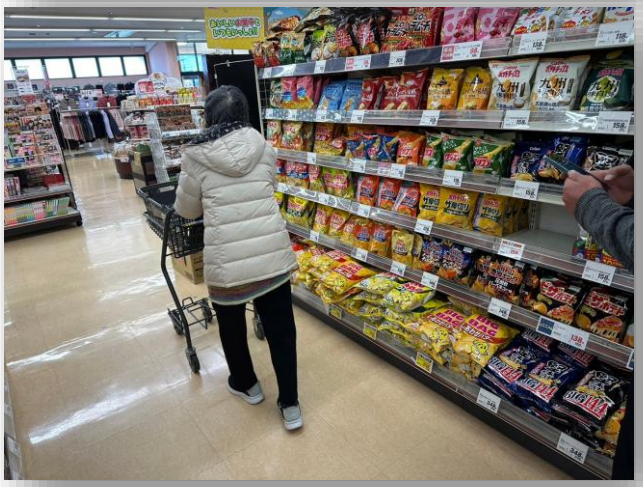




## 周りができること「大牟田市ほっと安心ネットワーク模擬訓練」

いざという時の情報伝達＆捜索の訓練

# 認知症とともに生きるまちづくりとは

楽しく買い物しながら、ご本人達と対話し記録する。



# 認知症とともに生きるまちづくりとは

参加店舗募集中

認知症で
あってもなくても
大切なお客様❗

## 認知症バリアフリー
## ワークショップinおおむた

**お客様から末永く愛されるお店づくりに
向けて語りませんか？**

大牟田市は、認知症になっても、誰もが住み慣れた家や地域で、安心して豊かに暮らし続けることができるまちを目指しています。

皆様のお店が「地域のお店」として、使いやすく、地域に愛され、認知症になっても、お客様として末永くご利用いただけるお店であり続けられますよう、実際の当事者の声をもとに、小売業の皆様を対象に、情報交換・ワークショップを開催いたします。

ぜひご参加くださいますようお願いします。

認知症で
あってもなくても
ずっと利用
したいお店❗

**日時　令和７年１月20日（月）**
**13:30～15:00**

**会場　大牟田市役所 職員会館３階**
**２・３会議室**

**テーマ「(仮)使いやすいお店について考える」**
進行　認知症地域支援推進員、市福祉課職員

**※ 次回は3月24日（月）の予定です**

**お申込み・お問合せ**

大牟田市福祉課
下記のいずれかの方法で、店舗名、参加者全員の役職及び氏名、電話番号をお知らせください。
TEL☎　0944-85-0470
FAX📠　0944-41-2662
MAIL✉　e-fukushi01@city.omuta.fukuoka.jp

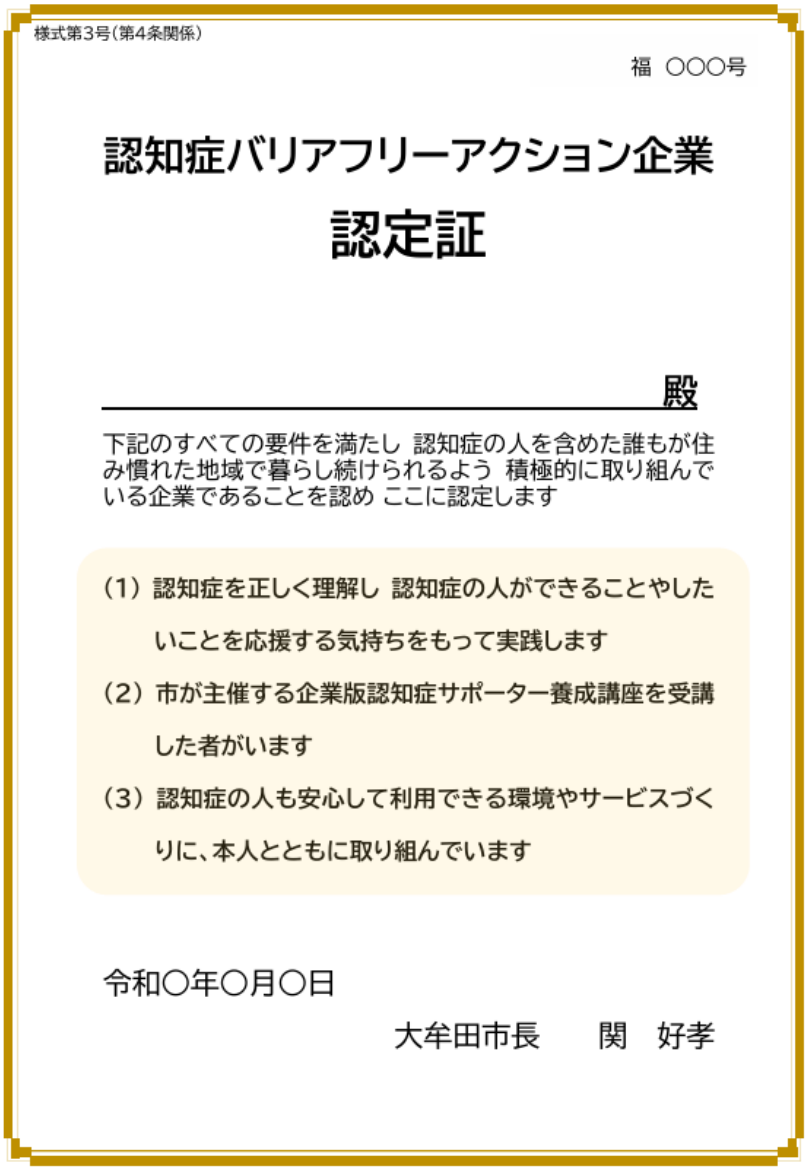
### ワークショップ参加店舗

・イオン九州
・イオンビック
・ホームセンターグッディ
・スーパー　マルショク
・グリーンコープ
・コマランド（福祉用具）

### 当日のスケジュール

・自分たち（店舗）が出来ていること
・本人たちの声からどんなことがやれそうか

# 認知症とともに生きるまちづくりとは


様式第3号(第4条関係)

福 ○○○号

認知症バリアフリーアクション企業

認定証

殿

下記のすべての要件を満たし 認知症の人を含めた誰もが住み慣れた地域で暮らし続けられるよう 積極的に取り組んでいる企業であることを認め ここに認定します

(1) 認知症を正しく理解し 認知症の人ができることやしたいことを応援する気持ちをもって実践します

(2) 市が主催する企業版認知症サポーター養成講座を受講した者がいます

(3) 認知症の人も安心して利用できる環境やサービスづくりに、本人とともに取り組んでいます

令和○年○月○日

大牟田市長　関　好孝

認定を受けるためには？

**1　企業版認知症サポーター養成講座及び認知症本人との意見交換会等に参加する**

□内容

企業版認知症サポーター養成講座＋意見交換等３回

| 回 | 名称 | 内容 |
|---|---|---|
| | 企業版認知症サポーター養成講座 | 認知症を正しく理解し、本人のできることを応援するサポーターを養成する講座です。企業版として、認知症にもやさしい環境づくりの視点も取り入れた内容となっています。 |
| 1 | 企業内環境点検 | 認知症本人とともに、「認知症の人も理解しやすいか、利用しやすいか」という視点から参加企業の環境について点検を行います。<br>※事例：本ページ内の「令和６年度の取組み」の買い物ツアーの記事をご参照ください |
| 2 | 意見交換 | １回目の結果をもとに、企業で改善できる点がないか本人と話し合います。<br>※事例：本ページ内の「令和６年度の取組み」の買い物ツアーの記事をご参照ください |
| 3 | 実践報告・認定式 | ２回目の内容をもとに各企業において実践を行い、その報告を行います。報告後、「認知症バリアフリーアクション企業」として認定します。 |

# 認知症とともに生きるまちづくりとは

| 視　　点 | 従来の見守り | 認知症基本法時代の見守り |
|---|---|---|
| 基本的な考え方 | 危険から守る | 本人らしい暮らしを支える |
| 認知症の人 | 見守られる対象 | 地域で暮らす一人の生活者 |
| 重視すること | 安全確保・事故防止 | 本人の意思・希望・尊厳 |
| 外出 | 道に迷わないようにする | 行きたい場所へ行けるようにする |
| 地域住民 | 異変を発見して通報する | 日常の関係の中で気にかける |
| 支援の方法 | 監視・確認・保護 | 声かけ・対話・必要な支援 |
| 目指す地域 | 事故が起こらない地域 | 認知症になっても暮らし続けられる地域 |

# 認知症とともに生きるまちづくりとは

## これからの「優しい見守り」3つの心得と実践

### 1.「監視の眼」から「あたたかいまなざし（肯定）」へ

・一方的に先回りして手助けするのではなく、本人が自分でやろうとしている姿を見守る。
・本人からのSOSや声かけ（「そっと手伝ってほしい」）があった時に、必要なことだけを自然体でサポートする。

### 2.本人の「自分で出かける工夫・ツール」を応援する

・本人の力を活かす視点（可能性指向）への転換。
・スマホの地図アプリやヘルプカード等を活用して自力で移動・外出するチャレンジ（タウンウォーク等）を、地域が温かく見守り・手助けする。

### 3.点から「面（街全体）」の認知症バリアフリーへ

・個人や家族だけで抱え込まず、地域のスーパー、ドラッグストア、駅・バスなどの交通機関、郵便局などの企業や住民全体で「当たり前に受け止める環境」を作る。

# 課題解決指向から可能性指向への転換

目の前の本人の可能性に目を向けて

ともに楽しみながら実践を重ねよう！